

今次世界大戦において漸く戦局傾くを覺えたる昭和十八年、十月には學生の徴兵猶豫特權停止され、後世にもその名残りたる「學徒出陣」の壯行大會實施せられたり。

同時に兵役法改正され、四十五歳まで徴兵さることとなりたり。當時の朝日新聞に次のごとき記事あり。

「この決戦を勝ち抜くために今や四十歳を越えた男子も、いつ何時たりともお召に應じて國防、増産の第一線につくべき戦闘體制が整へられた。四十五歳までは國家が「青壯年」たるべきことを要請したのであり、四十を初老」といふやうな言葉は即刻抹殺すべきはもちろん……」(十一月一日)

奈良時代より老の賀として四十歳を始まりとし十年毎に「還暦」「古稀」などと祝ひしたる老いの初めとしての「初老」の語あり。そが守られ來りしが、ここに朝日新聞、「四十を初老」といふやうな言葉は即刻抹殺すべき」と激しき越權の命令調、千年を越えて守られたる「言葉」を「抹殺せよ」と煽動す。大戦中の朝日新聞の言行、一貫して國民の尻に鞭打つて戦争に驅立てんとする姿勢、ここにも明白に讀み取らる。

昨年十月、多くの人に惜しまれてあの世に旅立たれし岡崎久彦元泰大使、日本、中國をはじめとする東南アジアの歴史に造詣深かりしはもちろん、戦後一番にケンブリッジに學びたることもありて、歐米各國の歴史書の虚實をもよく識る。かかる情報基盤の上に、明治維新以後の日本の外交通史をものにせられたり。その著作作業を振返へられて吐かれし心よりの感慨の言、伺ひしことあり、今に忘れず。

曰く、「明治以後の、日本を破局に招きし元凶は何なるかをつくづくと考へたる結論は、日本のジャーナリズムなりし」軍隊にも外交にもあらずと、淡々たる口調ながら日本の將來を心配さる。

福田稿存先生の絶えざる新聞批判も痛烈なりし、曰く「ここでも新聞は神になる」「現在の日本で最強力者は新聞である」等々岡崎大使以上の言あれども、明治以降の通史を巨細(こさい)に眺めたる上の岡崎大使の結論には一段の説得力あり。

そもジャーナリズムなる語、新聞、雑誌、放送など廣汎なる領域に亙る人や組織を含め得て定義曖昧なるものなれども、そが、今どき言はるゝクラウドに似て國民の心を茫漠と覆ひ、しかも誰が責任を持つかあいまいなるままに一つの強き勢力を形成す。

戦後の假名遣改悪におきて、急速に「現代かなづかい」が普及せるが何故なるかをいぶかかりしが、ここにも岡崎大使の「ジャーナリズムの惡」説、適用せらるゝとかと思

はる。新聞社が即刻文部省に随伴したるは措き、出版社などの古典や明治期の文章を出版するにあたりて、「歴史的假字遣」を恣意的に「現代かなづかい」へと書換へたることなど、日本文化の破壊行爲とさへ言ひ得む。硬骨漢の編輯者にしてもそこに目をつむりぬたるは、得體知れぬ「日本ジャーナリズム・クラウド」の故なるむ。

「この（現代）假名遣いは、科學、技術、藝術その他の各種専門分野や個々人の表記にまで及ぼそうとするものではない」と昭和六十一年に前書に書かれし「内閣告示」も顔を赧むるほど出版界は忠實なりし。

岡崎大使發言の年餘に、朝日新聞、從軍慰安婦の自紙の報道に過誤あるを告白す。されど毎日新聞、稻田朋美代議士の粘り強い追及にもかかはらず、未だ「百人斬り」の、戦意昂揚のための捏造なることの懺悔せず。國民の總意を傳へゐると稱しながら實は世論を己が信ずる方向に誘導するにたけたる日本のジャーナリズム、初老抹殺とまでは書かずとも、今後も民衆をミスリードせざるかと、亡き大使に従ひて案ずるものなり。